

国語問題 (四〇分)

(この問題冊子は表紙を含め四ページである。)

受験についての注意

- 一、 監督の指示があるまで、問題を開いてはならない。
- 二、 携帯電話等の電源は切ること。携帯電話等を時計としても使用してはならない。
- 三、 時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 四、 試験開始前に、監督から指示があつたら、解答用紙の番号が自身の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。
- 五、 解答用紙は二枚ある。解答は解答欄に記入すること。
- 六、 監督から試験開始の合図があつたら、この問題の冊子が、右に記したページ数通りそろって
いるかどうか確かめること。
- 七、 筆記具は、H、F、HBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆やボールペンなど
を使用してはならない。訂正する場合は、消しゴムで丁寧に消すこと。消しくずはきれいに
取り除くこと。
- 八、 解答用紙を折り曲げたり、破つたりしてはならない。
- 九、 試験時間中に退場してはならない。
- 十、 問題冊子と解答用紙を持ち帰ってはならない。

以上

次の文章を読んで設問に答えなさい。

私たちはふだん、自分の体が皮膚の（ア）りんかく線によって自分以外のものからはっきり区別されていると感じている。耳に差し込んだイヤホンは自分の体の中に入り込んでいても自分ではないし、顔の一部のように見えてもメガネが自分ではないと知っている。しかし、私たちが内と外とを分ける明確な境界線と感じている皮膚のりんかくは、本当にそれほどはっきりしたものなのだろうか。私たちは毎日食事をする。そのとき食べたものはただエネルギー源として消費されるだけではなく、分解されてその一部は体を構成する成分として取り込まれる。取り込まれるだけなら、どんな体は大きくなっていけばいいが、体重がそれほど変わらないのは、もともと自分の体を構成していた成分もまた分解されて、体外に排出されるからである。食事とは、自分の（a）にあるものを自分の（b）に取り込み、自分であったものを自分の（c）に排出し、自分と自分でないものを組み替えて、絶えず自分を新たに作り続けていく営みなのである。

しかしどんなに自分と自分以外のものが組み替わったとしても、自分と自分以外のものを混同してしまふことはない。自分は絶えず変化しつつも、自分は自分のままにとどまる。自分が途中で（d）になってしまふなんてことは起こらない。幼い時の自分と今の（e）では、顔立ちも体つきも服装も違えば、性格も（イ）しゅみも友人関係もみんな変わっている。それなのに、なぜ私は私の外に立つて私のことを（f）だと見なすことなく、私を私だと思ふことができるのだろうか。

国についても同じような疑問が湧いてくる。自分と自分以外のものを区別するように、私たちは自分の国と外国を区別する。ちょうど皮膚のりんかく線で、自分と自分以外のものが区分けされるように、国境線によって、自国と他国は区別されると私たちは信じている。しかし、身体のりんかく線が不動の境界ではなく、絶えず変動するように、国境線も、歴史を（ウ）たどってみれば、ずいぶんと移り変わってきたことが分かる。国と国の境もまた不動のものではないのである。またそれとは別に、国境をめぐる問題が存在していることも、私たちは知っている。（あ）隣接し合う二つの国の間で国境についての理解が異なる場合、どこに国境線を引くべきか合意は容易には成立しない。

しかし歴史の経過によって国境にどれほど大きな変化が生じたとしても、また国境についての理解が隣国とどれほど食い違っていたとしても、それはそれとして、私たちは自分の国に住んでいる限り、自分の国を自分の国と見なすことを当然のことと思ひ、自分の国の外に立つて（g）の国を外国だと見なすことはしない。視点を相対化して、内と外、自国と他国とを交換可能なものと見なすことがあつてもおかしくないのに、そういう風に見てみようとはなかなか思わないし、やろうとしても実際にそう見なすことは難しい。

一つ例を挙げてみよう。「環日本海諸国図」という地図がある。最初見たときは、どこの地図か分からなかった。それが日本を中心とした周辺諸国の地図だと知って、（X）青天の霹靂のように感じた。通常の日本地図では、北海道を右上に、沖縄は左下に見ている。ところが、この地図は、ユーラシア大陸の方から日本を眺めやったかのように、北海道が左に、沖縄は右にきている。普段見なれているものは異なり、通常の地図を時計回りに二二〇度ほどぐるりと回転させて上下を逆さまにしたものだったのだ。逆さまにしただけに、それが日本の地図だと気づけなかったことに軽いショックを覚えた。だがそれに続いて感じたショックはもっと大きなものだった。（A）見慣れた地図では見えなかったさま

さまざまなことが、突如見え始めたのである。通常の地図では、日本列島は一つの(エ)かたまりに見えるが、逆さ地図では、そのかたまりがバラバラに解体され、樺太から北海道、本州、九州、沖縄、台湾、さらにはフィリピンやインドネシアにまで連なる島々の一部分として見えてきたのである。

大都市の間の距離感も大きくグラついてくるのを感じた。札幌・東京間の距離より、札幌とウラジオストクの距離の方が近く、鹿児島・那覇間の距離よりも、福岡とソウルの距離の方が短い。こうしたことは注意深く地図を見れば(Y)一目瞭然なのに、なぜかその事実は隠されてしまう。もともと連続していた土地に境界線を引き、土地全体を一つの領域に分断して、その一方を内とし、他方を外と見なす視線が当然のものとして内面化されてしまうと、境界線を引いて内と外に分けることの人為性は見失われ、内部と見なされた領域が互いに(イ)凝集し合うようになる一方、その外部は遠くにあるものとして感じられるようになるのである。

日本海という海域についても大きな発見があった。日本列島を内とする立場から見れば、日本海は、(Z)同語反復的に日本海である他にない。ところが、件の「環日本海諸国図」では、日本海は、もともと大陸と陸続きだった列島が大陸から別れることよってできた湖のように見える。(B)韓国や北朝鮮では私たちが日本海と呼ぶ海域は東海(トンヘ)と呼ばれている。この事実からも明らかのように、一つの同じ海であっても、どこを内として見るかによって、それはまったく別のものになる。日本海とは日本という国に(ウ)帰属する海ではなく、諸国をつなぐ内海であることが見えてくると、人々は古来より船に乗って自由に行き来し、交易を行って文化を伝えてきたこと、その結果として混血が広く見られるようになったであろうことも理解されてきた。「環日本海諸国図」は、日本の重心が富山県沖の日本海にあることを強調するために富山県で作成されたようであるが、私には、その製作意図とは裏腹に、日本列島を内として見る暗黙のまなざしを(エ)脱臼させ、視線の脱中心化を可能にしてくれる特別な光学機器のように感じられたのである。

見知らぬ地図だと思っていたときは、陸や半島や島々はただそれとして識別できるだけで、そこに内と外との区別はなかった。ところが、その地図を一四〇度ほど時計回りに回転させて、見慣れた日本地図に戻してしまうと、もはや列島は住みなれた内部空間になり、わたしのまなざしはおのずとそこを中心と見なし、それ以外のところを外部として(お)表象し始めたのである。私たちは何かを見たり考えたりするとき、(h)でも気づかないうちに内部を設定し、その外部を内側から排除するような仕方で見たり考えたりしてしまう。そうしたことがなぜ起こってしまうのかということも大きな謎として追求しなければならぬが、それだけでなく、物事を客観的かつ公平に見るためには、自分自身の視点に拘束されてしまう思考の(オ)くせに自覚的になり、内を(i)として見るのを一旦やめて、それをあえて外から見た場合の(j)として捉えてみるといった訓練を積むこともまた重要なことなのではないだろうか。

問一 傍線部(ア)～(オ)を漢字に直しなさい。送り仮名のあるものは送り仮名も記しなさい。

(ア) りんかく (イ) しゅみ (ウ) たどつて (エ) かたまり (オ) くせ

問二 傍線部(あ)～(お)の漢字のよみ仮名を書きなさい。

(あ) 隣接 (い) 凝集 (う) 帰属 (え) 脱臼 (お) 表象

問三 (X) 「青天の霹靂」、(Y) 「一目瞭然」、(Z) 「同語反復」、それぞれの語句の意味を説明しなさい。

問四 aからjの空欄には、「内」「外」「自分」「他人」という語句のいずれかが入ります。どの語句が入るか、記しなさい。

問五 (A) 「見慣れた地図では見えなかったさまざまなことが、突如見え始めたのである」に関して、なぜ見え始めたのか、六〇字以内で説明しなさい。

問六 (B) 「韓国や北朝鮮では私たちが日本海と呼ぶ海域は東海(トンヘ)と呼ばれている」に関して、なぜそう呼ばれているのか、本文の論旨を踏まえ、六〇字以内で説明しなさい。